私はリアス

悪魔の魂

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リアス・グレモリーとして生まれた元一般人が、原作を無視して自由に生きようとするお話。

眷属？　いらない。

悪魔の未来？　どうでもいい。

原作？　知ったこっちゃない。

尚、原作が始まるまでにやってきたことが、ある意味裏目に出る模様。

目　次

自由を求めて ―――――――――――――――― 1
もっとリアスを知りたい ―――――――――――――――― 8

自由を求めて

『私』の名前は、リアス・グレモリー。年齢は四歳だ。

だが本人ではなく、前世の記憶を持ったままこの肉体に憑依した…いわゆる転生者というやつである。

それに気づいたのは、サーゼクス、グレイフィア、ソーナ、セラフォルーという交流のある人物の名前、そして彼らが私を呼ぶ時のリアスという名前に（何か聞き覚えがあるなぁ）と思っていた時に前世の記憶と一緒に思い出したのである。

私は、元は人間であったこと。

ここが前世でも知っていたハイスクール×?の世界だということ。

私は、ヒロインの一人であるリアス・グレモリーとして……悪魔として生まれ変わったのだということ。

何故前世の記憶が戻ってきたのかは分からない。

思い出した時、私は実家の自分の部屋に籠ってこれからどうするかを考えた。

ハイスクール×?のことを思い出した私は、当然原作の流れや登場人物なども思い出している。

せっかく原作の知識があるのだから原作通りに生きればいいのではないかと思ったが、よくよく考えてみれば面倒くさいことこの上ない。

その理由の一つが、リアス・グレモリーの眷属である。

原作では、悪魔の駒というものを使って他種族を悪魔に転生させて眷属にするのだが、はっきり言って他人の面倒なんて見る気はないし、王と眷属という上下関係も鬱陶しいだけだ。

いつだって自由に生きたい私は、前世の記憶を思い出した時に眷属は作らないと決めた。

だが原作のリアス・グレモリーの眷属は、リアスの眷属になったことで救われたものがほとんどだ。しかも、その内の三人は一度は死んで眷属になったことで生き長らえている。さらに、その三人の内の一人は主人公である。

彼らの辛い過去や死んでしまうことを知っていながら放置するのはどうかと思うが、だからって眷属にしても逆に迷惑をかけてしまいそうで怖い。
私に愛想を尽かし、はぐれ悪魔にでもなって原作の黒歌のように追われる身になってしまうのは絶対に避けたいのだ。
二つ目の理由が、私は悪魔だということ。
悪魔という力を持った人外として生まれた以上、否が応でも力は必要になる。
原作でも主人公とヒロインの一人は、人間でありながら神器という特別な力を宿していたために堕天使幹部に命を狙われる。
それ以前に悪魔社会は実力主義なため、自由に生きたいのならば、死にたくないのならば、力は絶対に必要なのだ。
もし、力をつけないままダラダラと過ごせば、二次創作で稀に見かけた『リアスアンチ』になりかねない。周囲の評価などどうでもいいが、無能姫や駄肉などと罵られるのは流石にくるものがある。
最後に余計なことを付け足してしまったが、私は考えに考え、そして答えを出した。
原作の眷属達を救うために、そして私の自由のために、先ずは力をつけよう。

♦

前世の記憶を思い出してから十数年経ち、あと数日で原作が始まる今日この頃。
原作通りに人間界の駒王学園に通い、高校三年生となった私は、駒王学園への通学路を歩く途中でため息を吐いてしまう。
その理由は、今の現状にある。
この十数年で、私は悪魔の基本知識は勿論のこと、身体能力や魔力は幼少の頃とは比べ物にならない程に上がった。
魔力は超越者と呼ばれており魔王でもある兄のサーゼクスや、最強

の女王と呼ばれたグレイフィアに鍛えてもらったし、二人がいない時も幼馴染であるソーナと一緒に修行したり、独自で鍛えて前世の記憶を頼りに技を生み出したりもした。
身体能力は、リアス・グレモリーの母方のいとこであるサイラオーグに頼んだ。
原作では生まれつき悪魔の魔力がなかったために、そんなサイラオーグを産んだ母共々周囲から迫害を受けたが、それでも折れずに自分を鍛え、純粋な身体能力のみで若手悪魔のナンバーワンにまで上り詰めた強者。
そんな彼は、肉体を鍛える相手としてはうってつけと言えた。
何をしたかというと、彼がやっている筋力トレーニングを一緒にやらせてもらったり、魔力無しの殴り合いをしたのだ。
私は魔力の修行もしていたため、全ての期間を筋トレに捧げてきたサイラオーグには流石に劣るが、それでも魔力なしの戦いならサイラオーグ以外には負けないだろうと思えるほどには鍛えられたと思う。
……魔王にも勝てるのか？と聞かれれば無理と答えるだろうけど。
大変ではあったが、人間の頃にはなかった力を扱えることや、自分は確かに成長していると実感できるあの時間には興奮と高揚を覚えた。
おかげで原作の初期のリアス・グレモリーよりは強くなれたと思う。……そこまで大きな差はないだろうけど。
次に原作のリアス・グレモリーの眷属達だが、現状誰も私の眷属にはなっていない。
つまり、私は未だ一人である。
だがそれで構わない。これこそが私の思い描いた現状なのだから。
先ずは主人公である兵藤一誠。
一誠が悪魔に転生するのは物語が始まった後なため、始まっていない今は転生していないのは当然ではあるが、例え原作通りに事が進んだとしても転生することはないだろう。
原作での一誠は、その身に宿している赤龍帝の篭手という神滅具を

堕天使達に感づかれ、危険と判断した上の命令を受けた堕天使レイナーレに殺され、その場に召喚されたリアスによって悪魔として転生して蘇るのだ。

だが一誠を……というより誰も眷属にするつもりがなかった私は、まだ幼い頃に偶然を装って一誠に近づき、悪魔という人外だと正体をばらした上で何度か顔を合わせてそれなりに仲良くなった時、さも今気付いたかのように赤龍帝の篭手のことを話し、このままでは自分のような人外に命を狙われるだけでなく家族も危ないと言って危機感を与えた。

原作では変態ではあっても根はお人好しな一誠は、私が自分を狙っているのだと疑うことはなく、寧ろ自分を鍛えてくれと言ってきた。

当然私は了承し、長い時間を掛けて一緒に鍛えた結果、今の一誠は禁手化できるほどまでに成長したのだ。

レイナーレは下級……大げさに言っても中級程度だから、これで一誠が殺されることはないだろう。

同時に私が一誠を眷属にする必要もなくなったわけだ。

次に白音……原作では『塔城小猫』として、リアス・グレモリーの戦車として悪魔に転生して眷属となった彼女だが、彼女は原作でははぐれ悪魔となった姉である黒歌と幸せに暮らしている。

妹のために悪魔に転生した黒歌が妹のために主を殺してしまってはぐれ悪魔扱いされる前に手を打ったのだ。

具体的に言うと、兄に黒歌のことを聞いた時、黒歌の主にも問題があったのではないかと兄に抗議したのだ。

原作ではシスコンであったサーゼクスも妹である私の言葉に耳を傾け、黒歌の主のことを調査し、妹である白音には手を出さないという契約を破ったことが明らかになり、黒歌ははぐれ認定されずに済んだのだ。

主を殺したのは事実なために監視付ではあるが、白音と黒歌はある程度の自由を許されて保護された。

これで白音を眷属にする必要はなくなった。

兄に私のことを聞いていたのだろう。顔を合わせた時は、二人に泣

きながら抱き着かれて礼を言われた。
その時は少しだけ嬉しくて、胸が暖かかった。
リアスの女王として転生するはずだった姫島朱乃だが、彼女は堕天使の勢力に属している。
原作で朱乃が悪魔に転生したのは、堕天使の血を継いでいる朱乃を快く思わない親族の襲撃によって母が殺され、堕天使である父だけでなく堕天使そのものを憎むようになり、家を飛び出して天涯孤独となったからだ。
その時私は思った。そもそも母親さえ殺されなければ朱乃が堕天使を憎むことはない＝天涯孤独にはならず、リアスの女王として転生する必要もない。
そう考えた私は行動に移った。
ソーナと一緒に人間界に遊びに来ていた時、偶然を装って姫島家へ向かい、姫島親子を殺そうとする姫島の親族たちを私の手で倒したのだ。
かなり苦戦したが何とか撃退し、あの時は本気で鍛えてて良かったと思った。
おかげで朱乃の母親は殺されることはなく、今でも親子三人で暮らしている。
まぁ、堕天使の血を継いだことが原因で殺されかけたというのは事実なために、父親である堕天使のバラキエルと朱乃の距離感が微妙になっているらしいが、憎んでいるわけではないから特に問題はないだろう。……多分。
ついでにいえば、二人を助けた時にバラキエルだけでなくアザゼルとも対面することになってしまったが、原作でも悪い堕天使ではなかった、寧ろリアス達を成長させてくれたから特に問題もないだろう。……ないよね？
騎士として転生するはずの木場裕斗・本名イザイヤだが、彼は原作と比べてそこまで違いはない。
悪魔に転生してはいないが、グレモリー家に保護された後に、身寄りがないということで悪魔の援助を受けながら人間界で暮らしてい

る。
兄達が悪魔らしくない悪魔でよかったと、この時は思った。
ちなみにだが一誠と面識があるらしく、時々一緒にいるところを見かける。
私も何度か声を掛けられたことがあり、その時の様子からして聖剣への憎悪も今は収まっているようだ。
原作ではリアスの僧侶でありハーフヴァンパイアであるギャスパー・ヴラディは、ヴァンパイアハンターに殺されてしまう前に私が保護し、最終的には一誠の元へ預けた。
原作でもギャスパーに対して親身になっていた一誠なら何とかしてくれると思ったからである。
一誠も、一誠の両親も、吸血鬼であることに驚きこそしたものの、快く了承してくれた。
一誠を鍛えるために何度も兵藤家に訪れていたが、その際にギャスパーとも顔を合わせていた。
どうやら神器を宿しているという共通点もあって、時間は掛かったものの、一誠に心を開いたようだった。
その際に、一誠を鍛えるついでにギャスパーの神器を制御する特訓もしたため、私もそれなりに仲良くなっていると思う。
最初は誰に対しても怯えていたギャスパーの笑顔を見ると、少しだけ微笑ましい気分になった。
余談だが、ギャスパーを紹介した時に一誠は『金髪美少女だヒャッホウ！』と喜んでいたのだが、女装した男の娘だということを伝えると、膝から崩れ落ちていた。一誠の両親は驚いた後に苦笑いしてたわ。

こうして、何時だって自分の好きに……自由に生きるつもりだった私は、誰も眷属にすることなく、一人で物語を迎える訳だ。
先に言っておくが、私は原作の眷属達と仲良くなりたかったわけではない。
あくまで彼らの不幸を知っていながら何もしないのは後悔しそう

だったからであり、目的を果たした後は、付き合いも必要最低限にすると決めていた。
　原作の知識があるとはいえ、前世の記憶を思い出した以上、どうしても彼らは他人としか思えなかったからである。
「おっはにゃん♪　リアス♪」
「おはようございます。リアス姉様」
　後は私の知らないところで幸せに生きてくれればそれで良かった。
「うふふふ。おはよう　リアス」
　順調だった。全てがうまくいっていたのだ。
「おはようございます。リアスさん」
　それなのに……
「お、おはようございますぅ。リアスお姉ちゃん」
「おう。おはよう　リアス」
　何で皆ここにいるの？

もっとリアスを知りたい

皆と朝の挨拶を済ませ、学校の教室で授業を受けている現在。
一年の教室では白音とギャスパーが、二年の教室では一誠と裕斗が同じように授業を受けていることだろう。
私がいる三年の教室。
チラリと横を見る。授業が退屈なのか、ウトウトと夢の世界に入りそうな黒歌がいる。
チラリと反対側を見る。真面目に授業を受けているように見えるが、私と目が合うとニコッと笑う朱乃がいる。
正面を見る。教壇に立った教師が授業をしているが、その言葉は全く耳に入らない。
（どうしてこうなったのよ……）
眷属にしていない原作の眷属達が、全員駒王学園に通っている。私が現状にため息を吐く理由がこれであった。
人間であり、原作でも物語が始まる前から駒王学園に通っていた一誠、そんな一誠と一緒に暮らしているギャスパーの二人は何処もおかしくないし、裕斗も悪魔の援助を受けながら暮らしているため、勉強のために悪魔が管理するこの学園に通うだろうとは思っていた。
だが、白音、黒歌、朱乃の三人は完全に予想外だった。
特に朱乃は堕天使勢力に属しているため、和平が成立していない現在、悪魔である私とは敵対関係にあると言っても過言ではなく、その敵が管理するこの学園に通うことはまずないだろうと思っていたのだ。
再会した時、三人に何故ここにいるのか聞いてみたら、人間界の知識を学ぶため、そして……
『白音がリアスに会いたいって言ったのよ。ま、私も会いたかったんだけどね。にゃは♪』
『また会えて嬉しいです。リアス姉さま』
『……会いたかった／／／』
……私に抱き着きながらこの反応である。

いや何で？
白音と黒歌は過去のあの件以降もちょくちょく会ってはいたが、顔を合わせれば挨拶して少しばかり世間話する程度であり、姉さまなんて呼ばれるほどのことをした覚えはない。
朱乃に至っては、過去の母親の件以降一度も顔を合わせていなかった。それなのに何故、頬を紅く染め、恋する乙女のような顔で『会いたかった』なんて言われるのか全く分からない。
自分なりに考えてみたが、結局真意は分からず、私は考えるのをやめて授業に集中することにした……が。
「ふにゃ～」
チラっ
集中しようと言っておいて何だが、集中できない。
前世でもあったことだ。赤の他人ならそこまで気にすることもなかっただろうが、学校で何度も交流があり、全く関係のない他人とは言えなくなってしまったこの二人が隣にいるとどうしても気になってしまう。
しかも、その二人が原作キャラだから余計にだ。
中学に上がってクラスが別々になり、あまり関わらなくなった小学時代の友人と廊下ですれ違ったような気分である。
要するに気まずい。
「ふにゅ～」
チラっ
もはや完全に夢の世界に入って爆睡している黒歌はまだマシだが、さっきからチラチラと私を見ては頬を紅く染めてニヤニヤと笑う朱乃は何なの？　気になってしょうがないんだけど。
原作を見ても思っていたことだが、『いつもニコニコしているあらあらうふふ系のお姉さん』である朱乃が、私は苦手なのだ。
誰もが見惚れるその美しい笑顔の裏で、実は結構どす黒いことを考えているのではないかと、嬉しさや興奮よりも、疑わしさや恐怖心のようなものが先に湧き上がってくるからである。
そういえば、朱乃は原作のリアスに『究極のＳ』と呼ばれていた。

もしかしたら朱乃の中で、私は縄で全身を縛られ、靴を舐めさせられ、手に持った鞭でバシバシと叩かれ、父から受け継いだ雷の力を使った弱めの電気ショックでも受けてるんじゃないだろうか。頬を紅く染めるのも、ニヤニヤと笑うのも、そういう意味で興奮しているからなのだろうか。

あ、ヤバい。自分で想像しておいて何だが、そんなあられもない自分の姿、そしてそんな自分の姿を想像した自分が恥ずかしくて涙が。

私は両手で顔を覆い、少しだけ首を横に振りながら、恥ずかしい思考を中断する。

そして、クラスメイト達には聞こえないようにため息を吐いた。

（ホント、どうしてこうなったのよ……）

何で同じ学校に通っているのだろう。

何でクラスが同じなのだろう

何でよりにもよって隣同士なのだろう。

原作の眷属達を救えたのはいいが、ある意味思い通りにはなっていない現状に、再びそう思わずにはいられなかった。

♦

人間と堕天使の間に生まれたハーフ。それが姫島朱乃（私）だ。

姫島は古くから日本を魑魅魍魎から守ってきた一族であり、それ故に親族たちは快く思わなかったのだろう。

堕天使の父と交わった母の姫島朱璃、その二人の間に生まれた私は幼い時から汚点として扱われてきた。

親族と顔を合わせる度に嫌味交じりの忠告のようなことを言われ、顔を険しくして不機嫌になる母を見て泣きたくなるのを必死に堪えていた。

だがそれでも私は幸せだったと言えるだろう。

母は汚点である私を責めることもなく自分が産んだ娘として大事に育ててくれたし、堕天使の父は仕事で家を空けることが多いが、帰って来た時は親子三人で楽しい時を過ごしていた。

汚点として扱われるのは辛いが、この時の私はこのままでいいと思っていた。変わらなくていいと思っていた。

何が起こっても、父と母がいてくれれば、三人でなら乗り越えられると思っていたからだ。
だが、その考えは甘かった。現実はそんなに優しくなかった。
痺れを切らして我慢できなくなったのか、遂に親族が私と母を排除しようと動いたのだ。しかも堕天使の父が仕事で不在な時を狙うという、私と母にとっては最悪と言えるタイミングでだ。
母が応戦したが、複数いる相手に対し、こっちは母と私だけ。だがこの時はまだ幼かった私は戦いに参加できず、実質母一人だけだった。
母は姫島としても優秀な部類であったが、流石に多勢に無勢。もはや戦いではなく一方的な蹂躙となった。敵を倒すのではなく、娘である私を守ることを最優先していたのも理由の一つだろう。
身体の至る所から血を流し、遂に膝をついた母の後ろでビクビクと震えながら、私は心の中で全てを諦めていた。
（母さまも私も……ここで死ぬんだ……もう終わりなんだ）
私を見て『ごめんね。守れなかった』と言う母の背中に抱きついて、二人で泣きながら死を覚悟した時だった。
突然禍々しさを感じる紅のオーラが視界に入り、それと同時に私たちに止めを刺そうとする親族たちが吹き飛ばされたのだ。
涙を流したまま呆然とし、我に返ってオーラの出所に目を向けると、そこには禍々しさを感じる紅とは別に輝いているように見える紅髪の少女と、私たちと同じように呆然としている黒髪の少女がいた。
紅髪の少女は私たちに近づくと『えっと、大丈夫？』と心配するように声をかけてきた。
二人に何か違和感を感じていたが、体制を整えた親族が『悪魔』と言ったのを聞いて納得した。
悪魔は姫島にとっては敵も同然だが、母は全く敵意を感じないこの二人に私を託して逃げるように言った。
当然私は反対しようとした。私を大事に育ててくれた母を、最後まで私を守ってくれた母を置いて逃げるなんて絶対嫌だった。
だが私が言うよりも、紅髪の悪魔の少女が先に口を開いた。

『ダメ。それじゃあこの子が悲しむ。現に今も泣いてる』
そう言うと、紅髪の少女は私たちに背を向ける形で母の前に立ち、全身に先程と同じ紅色のオーラを纏った。
まるで『私がやる』とでも言わんばかりに。
『ソーナ。二人をお願い』
紅髪の少女がそう言うのと同時に戦いが始まった。
無理だ。最初はそう思った。
見たところ、彼女は私と同年代くらいの子供であり、悪魔という人外とはいえ、たった一人でこの状況をどうにかできるとは思えなかった。
今の満身創痍の母を見て余計にそう思った。
だが、戦えない私は全てを任せるしかなかった。
もし彼女が負けたら、私と母は殺されるだろう。
そんな未来を避けられる可能性が少しでもあるなら、それに賭けてみようと思った。
相手が一人、また一人と倒れていく度に希望を感じ、紅髪の少女が傷を負うのを見て絶望が一気に押し寄せてくるのを感じながら、三人で無言で見守っていた。
そして……
『ば、バカな⁉　我々がたかが悪魔の子供一匹に⁉』
『はぁ……はぁ……これで……終わりよ……』
勝った。勝ってしまった。
母でも倒せなかった彼らを、少女はギリギリとはいえ倒してしまったのだ。
最後の一人を気絶させ、少女は一度息を整える。
『凄い……』
『こんなに強くなってたなんて……』
呟く二人に対し、私は無言で少女を見つめた。
服も身体もボロボロで、短刀が刺さって血が滲んでいる左腕を右手で抑えながら、フラフラとこっちに戻ってくる。
母と同じように満身創痍だった。

自分の心配よりも、私たちに巻き込まれていないかを心配しする少女に私と母は助けてくれたことに礼を言った。
そのタイミングで堕天使の父がもう一人と一緒に戻ってきた。
駆け寄ってくる父に母は『遅いわよ……バカ……』と言いつつも笑顔で気絶した。最悪の結果にならなくて良かったと思っていたのかもしれない。
とにかく治療のために母を運ぶことになり、私はその前にもう一度彼女に礼を言い、せめて名前だけでも教えてもらおうとしたのだが、気付いた時には黒髪の少女ともう一人の堕天使と一緒にいなくなってた。
何故？と思ったが、今は母を優先だと深追いはしなかった。
ここに来たということは、近いうちにまた会えるだろうと思っていたからだ。
だが、この家にいてはまた狙われる危険があるということで、私は母と共に父が所属している『神の子を見張る者（グリゴリ）』に保護されることになり、あの紅髪の少女には会えなくなってしまった。
でも私は諦められなかった。
例え偶然だとしても、殺されるはずだった私と母を救ってくれた。ボロボロになりながらも最後まで守ってくれた。
そんな彼女に、私は憧れた。彼女みたいになりたいと。
誰かに守られるのではなく、守れるように強くなりたい。
そして叶うなら、もう一度彼女に会いたい。碌なお礼もできないまま終わりたくない。私と母を救ってくれた彼女のそばに居たい。守りたい。
でも今の自分では力不足だというのは嫌と言うほど理解していた。
『無事でよかった』と言ってくれたのが嬉しくて、同時に悔しさも感じていた。
だから私は力をつけた。強くなるために殺されかける要因となった堕天使の血も受け入れた。
母が戦っているのに自分は後ろで震えながら見てただけ、そんな無様な姿は二度と晒したくない。

あの時のもう一人の堕天使・アザゼルから教えてもらった『リアス・グレモリー』という名をしっかりと記憶し、暇があれば修行しながら十年近い時を過ごした。
必ずあの紅髪の少女と再会することを心に決めて。

そして、現在。
チラリと横を見る。視線に気づいたのか、私と目を合わせてくれる。
いる。確かに私の隣にいる。十年前よりも立派に成長した紅髪の少女が。
それが嬉しくて、思わず頬が緩んでしまう。
彼女……リアスと一緒にいると、とても心が安らぐ。
リアスと一緒に過ごす昼休みは、放課後は、休日はとても充実している。
リアスを慕っているのは私以外にも結構いるためにずっと一緒に居られるわけではないが、それでも十分すぎるくらいだった。
アザゼルに無理を言ってこの学園に入学してよかった。
リアスが駒王街の駒王学園に通っているという情報を掴み、アザゼルにこの学園の管理者である悪魔に話を通してもらったおかげでリアスと再会を果たすことができたのだ。
今は授業中であるが、私は隣にいるリアスが気になって何度もチラ見してしまう。
そして、両親の性癖の影響なのか、いつも妄想してしまう。
『ふふふ、朱乃の肌、柔らかいわね。ほらほらここがいいのかしら?』
『ひゃん／／／』
後ろから抱きつくリアスに弱いところを触られ、私は顔を紅く染めながら身体をビクンと反応させてしまう。
『すんすん……いい匂い。　味はどうかしら』
『ああん／／／クビ…なめちゃだめぇ…』
『あら、ダメなの?　じゃあやめましょうか』
『リ…リアスのいじわるぅ…』

私の全身が熱くなり、胸に添えられていたリアスの手がついに私の下腹部に……。
そこまでいったところで、私は無理矢理思考を中断させる。
授業中だというのに何を考えているのよ私は。
これも全部母さまから責められて興奮している父さまのせいだ。ワタシはワルクナイ。
顔が紅く染まっていることを自覚しながら、私はもう一度リアスを見る。
そして言葉を失った。
リアスが泣きそうな顔をして、見られたくないというように顔を両手で覆い隠してしまった。
どうして？リアスのあんな顔、今まで見たことなかった。
そういえば、リアスと一緒に過ごしている時、リアスが愚痴を言ったり弱音を吐いたりすることは一度もなかった。
私はリアスと一緒にいられることが嬉しくて考えもしなかったが、もしかしたらリアスは悩みや不安を一人で抱え込んでいるのではないだろうか。
もしそうだとしたら、私は愚かだ。
自分の心が満たされることばかり考え、リアスの心中を理解しようとしなかった。
幼い時からあれだけ強かったリアスなら大丈夫だと無意識のうちに思っていたのかもしれない。
誰しも悩みの一つや二つあってもおかしくないというのに、考えもしなかった自分が恥ずかしい。
悩みがあるなら打ち明けてほしい。
一人で抱え込まないでほしい。
私を頼ってほしい。
この時を境に、私はリアスのことをもっと知りたくなった。